弘前大学教育学部紀要　第106号：23～30（2011年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 106：23～30（Oct. 2011）

知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアに対する保護者の意識

A case study of parents' awareness toward university student volunteers in adapted sports for person with intellectual disability

大山　祐太*・増田　貴人**・安藤　房治**
Yuta OYAMA*, Takahito MASUDA**, Fusaji ANDO**

論文要旨

大学生ボランティアの存在する知的障害者スポーツ活動に、子どもが参加している保護者３名を対象とし、１対１の半構造化インタビューを行った。

結果、以下のことが確認された。①スポーツ活動における指導者に対しては、子どもの性格や障害についての理解、スポーツについての知識、またそれらを学ぼうとする指導者としての高い意識が求められると考えており、ボランティアの行動や姿勢から個別に評価をしていた。②知的障害者と友人的な関係性が築きやすい点や、発想の豊かさなどから若年層のボランティア全体に対するニーズがあることが確認された。③保護者は、子どもへの長期的な一貫した指導を求めており、大学生は卒業後に活動参加が難しくなることが懸念される点であると考えられていた。

キーワード：大学生ボランティア 保護者 知的障害者スポーツ

問題と目的

知的障害者は、食べ物・食べることへのこだわりがある場合や、健康管理への意識づけに困難性があるなどの理由から肥満傾向にある（原ら，2001．我妻・伊藤，2002など）。このような現状の中、余暇の充実、健康の維持・促進としても、スポーツ活動は有意義な活動となりえるが、知的障害者は、スポーツ活動に取り組みにくい環境にある。その背景として、知的障害者のスポーツ活動は、医療的リハビリテーションと結びつきやすかった身体障害者のスポーツ活動に比べて目を向けてこられず（渡邊，2006）、経済的な問題、物的・人的環境が整っていないことが考えられている（望月，2007）。実際、我が国の知的障害者の余暇の傾向としては、多くは室内でテレビ観賞や音楽鑑賞などをして過ごしていることが報告されている（高畑・武蔵，1997、石黒ら，1999）。

このような流れを受けて、これまで知的障害者のスポーツ活動は、民間・非営利活動組織によって活動が推進され、現在もボランティアによって支えられている実状がある。スポーツ活動の重要性や地域や社会に浸透段階にある知的障害者のスポーツ活動には、ボランティアの存在は不可欠といえる。

ボランティア活動は、ボランティア本人にとっても有益な活動である。特に、若者にとって他者へ対する成功的な援助経験は教育的効果が高く（妹尾，2003）、多様な能力の育成や地域貢献という視点から大学もボランティア活動を推進している（文部省高等教育局，1999）。知的障害者のスポーツ活動における指導者不足という課題を解決するためにも、木谷（1997a）がそのマンパワーの大きさから学生を主体とした若い世代の育成の重要性について触れているように、今後の社会を担う大学生に対する期待は高まっていると言える。

しかし一方で、若さゆえに自己満足的な動きに終始したり、財政的問題で活動に無理が生じてしまったりなど、大学生ボランティアならではの課題について指

＊　弘前大学大学院地域社会研究科
Graduate school of regional studies, Hirosaki university, A student
＊＊弘前大学教育学部
Faculty of education, Hirosaki university

摘されている（木谷，1997b）。知的障害者がスポーツ活動に参加する際、保護者の引率や経済的援助が必要となる場合が多く、保護者自身も活動への必要性や魅力を感じられるかどうかが、参加を決定づける重要な要因となる。守田・七木田（2004）がおこなった知的障害児の保護者のニーズ調査によると、体育・スポーツ活動の指導者が障害についての専門性をもっていることが、参加の促進要因となっていた。しかし、大学生ボランティアは社会経験が少なく、必ずしも専門性が保証されているとは言えない。さらに、松尾（2002）が指摘するように、スポーツ活動におけるボランティアは、スポーツの専門性を確保することより、ボランティアでおこなうこと自体が重要であると強調される風潮がある。これらのことから、特にボランティアによる支えが大きい知的障害者スポーツ活動においては、大学生ボランティアに対して保護者はどのような意識をもっているか、十分な議論が必要であると言えるだろう。

本研究は、スポーツ活動に参加している知的障害者の保護者の大学生ボランティアに対する意識を通して、今後の知的障害者のスポーツ活動の充実に向けた示唆を得ることを目的とする。

方　法

１．手続き

大学生ボランティアが存在する知的障害者のスポーツ活動支援団体（チームＳ：仮名）において、会員である保護者３名に対し、１対１の半構造化インタビューを行った。実施にあたっては、大まかな質問項目は設定したが、一問一答ではなく会話の体でなるべく自由に話してもらい、不明瞭な点があれば、話の妨げにならないよう配慮しながら確認した。インタビューの場所は、調査協力者の居住地域との距離や利便性、調査対象にとって心身ともに負担の少ない場所であることを考慮し、地域の社会福祉センターの会議室を利用した。不特定多数の人が立ち入ることがなく、外からの不必要な音や声をシャットアウトすることができるため、インタビューを実施するに適切な環境である。インタビューの時間は、ひとり100分～150分程度であった。調査期間は2010年10月～11月である。

分析においては、得られた回答において重要と判断される部分を抽出し、内容分析を試みた。具体的には、言葉の意味の解釈を行い、調査協力者間での比較を行い、相違点や類似点について把握した。

また、データの信頼性を確保するため、インタビューデータをまとめた後に、解釈に齟齬がないか調査協力者に確認してもらった。さらに、質的研究に造詣が深い研究者によるスーパービジョンや、大学院生・大学生が在籍しているゼミにおいて調査結果を報告し意見を仰ぐなどの手続きもふんだ。

２．対　象

３名の調査協力者については、データの妥当性を考慮し、ある程度の頻度当該活動へ子どもが参加しており、保護者自身も見学や応援をするなどして活動内容について理解していることを条件として抽出した。毎回活動場所に足を運んでいても、子どもの送り迎えをしているのみであるケースは除外した。

また、ダウン症児の母親よりも自閉症児の母親の方が、子どものハンディの状態においてストレス度が高い（Holroyd and McArthur,1976）など、子どもの障害の状態によって保護者の心情も異なることが考えられた。そのため、子どもの障害の診断名と知的障害の程度、子どもの年齢、保護者の年代、活動参加歴において、偏りが生じないように抽出した。調査協力者の抽出には、全会員の参加状況を把握しているチームＳの事務担当者及び、ボランティアリーダーの協力を得た。調査協力者のプロフィールは以下の通り（Table.1）。

Table.1調査協力者のプロフィール

対象	性別	年代	参加歴	子の性別，年齢，障害（程度）
A	女性	40代	５年目	男性，16歳，自閉症（中度）
B	女性	30代	２年目	女性，８歳，知的障害（軽度）
C	男性	60代	７年目	女性，31歳，ダウン症（中度）

３．倫理的な配慮

倫理的な配慮として、調査協力者にはプライバシーの厳守及び、研究の趣旨、録音・フィールドノートの作成・分析手順・結果の公開といったデータの扱いについて説明し、すべての事項に同意する意思の確認を行い、研究協力への了承を得た。

結果と考察

インタビューの結果から、特徴的と思われる箇所を抽出し、分析・考察を加えた。会話データ内の「　」は調査協力者の回答の引用、（　）は筆者の補足である。会話データにおいては、適宜、個人名や団体名などを仮名に修正し、方言によって意味の理解が難しい

回答内容に関しても、ニュアンスを変えてしまわないよう配慮し標準的に用いられる言葉を補足した。以下、質問項目ごとに得られた回答を一部抜粋し、具体的に見てゆく。

【1】スポーツ指導者に必要な資質

スポーツ指導者に必要な資質としては、大きく『子ども個人についての知識』、『スポーツについての知識』、『指導者としての心構え』と解釈できる、３つの要素が挙げられた。

１．子ども個人についての知識

会話データ１，２が示すように、保護者は、障害特性についての知識をもっていることを、指導者に必要な資質として挙げていた。また、会話データ１下線部①や会話データ３下線部③からわかるように、単純に障害について詳しければよいというのではなく、参加者個人の性格や個性についても言及している。ここからは、性格や障害特性など様々な情報をもとに、子ども個人の心身の状態について詳細に正確に把握してほしいという願いがあると解釈できる。子どもそれぞれの実態に即した指導を求めていることがうかがえる。

≪会話データ１≫Ａ
「やっぱり、この子どもたちの性格とか、特徴ちゃんとんと覚えてもられないと①、けがもするし。前もって自閉症とか、学習障害者の子どもたちのこともちゃんと、こういう特徴持ってる子どもたちだっていうのをわかって、チームＳに来てもらわないと②。」

≪会話データ２≫Ｂ
「障害のある子なので……その、障害も様々ですよね。私は今のは満足なんですけど、あえて言うならば（笑）いろいろな障害の知識っというか、そういうのあるのかな～？と思いますけど。」

≪会話データ３≫Ｃ
「例えば、この子はちょっと、うん……何するにもうまくいかない、この子は何でもハイハイって言うだとか、個性もった様々な参加者いますよね③。」

２．スポーツについての知識

また、筋肉の動かし方や競技における知識・技能といった、スポーツについての知識が豊富であることも、指導者に求める資質として挙げられた。このことからは、ただ楽しく運動できる活動ではなく、競技能力や運動技術の向上も求めていることがわかる。これは、「レクリエーション」や「体を使った遊び」ではなく、チームＳのように「スポーツ活動」支援団体だからみられる特徴であると考えられる。ルールに則って各競技の指導をおこなう団体だからこそ、競技志向の保護者・知的障害者が参加したり、活動を継続したりする中で、技術向上の意識が醸成されていったものと考えられる。

≪会話データ４≫Ｂ
「こう手の動かし方とか、こう筋肉がどうゆうふうに動くかとか、どこの部分がどうゆふうに動いてるかとか、そういう、やっぱり知識があってこそ部分がわかると思うんですよね。」

≪会話データ５≫
Ｃやっぱりあの専門的なね、知識ですね。種目によってその、もう本当に身についていた方が説得力あるし。」

３．指導者としての心構え

３つ目は、前述した『子ども個人についての知識』『スポーツについての知識』に繋がる部分があるが、指導者としての心構え』と解釈できる内容であった。保護者は、指導者である以上、子どもたちの障害についてまたはスポーツについては、ある程度勉強してくることが必要であり、そもそもそういった意識をもって臨んでほしいという認識をもっている（会話データ１下線部②、会話データ６～９）。指導する点はしっかり指導して、必要な知識は学ぼうとする、指導者としての自覚や威厳、気構えが求められている。

また、会話データ６下線部④、会話データ10下線部⑤からわかるように、保護者は大学生ボランティアが指導者として信頼に足る人物かどうか、指導者自身の様子から見て取れるということを指摘している。大学生ボランティアのことをよく観察し、知的障害者との接し方や指導の方法、指導のための予備知識、指導に臨む姿勢などから個別に評価をしていることが確認できる。

≪会話データ６≫Ａ
「やっぱしあんまりこういう子どもたちのことわかってなくて入ってきてれば、おどおどしてどうして接していいかわかんねってするボランティさんも見かけるので。あ、この人やっぱしあんまりわからなくて入ってきてるんだべか～って、やっぱしわかるので。親も見てればさ④。」

≪会話データ７≫Ｂ
「障害の子たちと触れ合う機会があるので、ある程度頭に入れてきて……さらに障害の子どもによって違うので、こう扱って、こういう扱いするとすごい楽に扱えるんだなとか、そういうのちゃんとわかろうとして。」

≪会話データ8≫ C
「それから、あとは参加者に対して差別しない。」

≪会話データ9≫ C
「まずほめてもらいたい。それから、いいことと、やっちゃだめなこと、ルールね、これはやっぱりきちんと教えていただきたい。」

≪会話データ10≫ C
「動き見てれば私たちだってわかるわけ、この人あんまり大したことないとか、そういうの感じてるわけさ（笑）コーチずっとさ、みてたらこの人の言うことは聞こうかなってなんて（笑）⑤。」

【2】大学生ボランティアに対する意識

１．友人的存在

保護者は大学生ボランティアを、参加している知的障害者と年齢が近いことから、友人的なかかわりができる存在であると認識していた。知的障害者にとって親しみやすいということが挙げられた。知的障害者はプライベートな時間を友人と過ごすことが少ない傾向にあり（中山，2000）、山田（1990）は通所施設に通う知的障害者の保護者は「友だちを作ってほしい」「友だちと遊んでほしい」というニーズがあることを報告している。また、於保（2004）の調査でも、10代の知的障害児の親は、卒業後の子どもの余暇活動について期待したいこととして、親以外の人との交流についての回答が最も多かった。今回の結果も、知的障害者の親は子どもの交友関係に対して不安を抱えていることがうかがえ、先行研究と同様であることが確認された。

チームＳにおいては、参加している知的障害者の年齢は最年少が７歳で最年長は32歳でその多くが中学生や高校生であり（調査実施時）、大学生ボランティアはそのほとんどが20歳前後である。指導場面でこそ指導者―被指導者という関係性になるであるが、会話データ11～13で確認されるような友人的なかかわりは、同世代のボランティアだからこそ可能なことだと考えられる。しかしこれは、「大学生」に限定されるのではなく、「若年層」全体に言えることなので、保護者は友人的な関わりをしてくれる若年層のボランティアに対する期待があると判断できる。

≪会話データ11≫ A
学生さんのボランティアさんはやっぱり年も近いから、友達感覚ってするか、そういう感覚で接してくれてるので、それは私はいいと思ってました。」

≪会話データ12≫ B
「ある程度の年齢になってくと、自分の目標として、大人じゃなくて、近い年齢のお兄さんお姉さんを理想像として求めるんですよ。」

≪会話データ13≫ C
「選手（知的障害者）とあんまり年の差もはなれてないから、選手も慕ったりなんか、指導面でもさすごくいいと思うんですよ。」

２．柔軟な発想やバイタリティ

発想の豊かさや、バイタリティについても、若い世代ならではの要素として認識されていた（会話データ14～16）。保護者は、スポーツ指導の際に参加者である知的障害者にわかりやすい指導方法を取り入れたり、効果的な支援ツールを作成したりといった、大学生ボランティアが講じる様々な工夫について肯定的に捉えており、それを若さゆえの発想力であると認識していた。チームＳにおいては、教育学部か社会福祉学部在籍の大学生ボランティアがほとんどであり、大学の授業で知的障害者や自閉症者に対する具体的なアプローチ方法など、基本的な知識を習得していることが考えられた。そのため、ここでの知的障害者へのスポーツ指導における発想力が、全ての大学生ボランティアに当てはまるとは言い切れないのだが、従来になかった新しい手法を取り入れるという考え方は若者ならではの考え方と言えるだろう。また、そのように効果的な指導方法を探るべく様々なことを試みるという行動力、それらを準備・実行するだけの時間的余裕があるというのも大学生の特徴と言えるのではないだろうか。

≪会話データ14≫ A
「（作成したツールに対して）そういう発想あるのってすごいよね。いや～、考えたなーと思って。親でもここまで考えられないなと思って、今日それはすごくすごく感心して見てました。さすがわっけはんで（若いから）。」

≪会話データ15≫ C
「そういう頭もちょうどきれてるときだから、発想もね、すごい……だからいい時なわけさ、いい時。」

≪会話データ16≫ C
「そして若い人は体力もあるしさ、それとあの、行動力やっぱりあるわけでしょ。」

３．将来性

さらに、会話データ17のように、今後社会人となったときに、現在の知的障害者スポーツでのボランティ

ア経験を生かし、知的障害者に理解ある社会を構築することができるという、将来性に期待できる点も大学生の特徴として挙げられた。会話データ18からもわかるように、日々の子育ての大変さから、子どもを預かってくれるボランティアに対するニーズの高まりがあるのではないだろうか。特にBは、排せつの失敗経験や、子どもが集団とうまく行動できないことなどから、過去に一般のスイミングスクールになじめなかった経験がある（会話データ19）。社会に出てから、チームSでのボランティアの経験を生かして、知的障害者のスポーツ活動・知的障害者に対する社会の認知をよりよいものにしてほしいという、親としての期待もあるのではなかろうか。

≪会話データ17≫C
「若い人がそういう活動（知的障害者スポーツ）を通して社会さでてくわけでしょ、そうするとあの……いろんな人と関わる時点でさ、そういうのをね、こういうの（知的障害者スポーツ）もあるんだよってね、いっぱい広げてもらえるんですよ。」

≪会話データ18≫B
「お母さんがたは連れていって、見てるだけですごく満足してるって状態なので、誰かが見ててくれるってだけですごい嬉しいものなんですよ。」

≪会話データ19≫B
「やっぱり知的な障害もあって、みんなと同じにやることもできなかったので。それで水泳は考えたんですけど、そこでちょっとその……排泄の失敗があって、なかなか機会を見ていたんですけど。」

４．卒業に伴う離脱

また、会話データ20～22からわかるように、大学生に対しては、実習や就職活動など学年が上がるにつれてスポーツ指導に充てる時間が減ってしまうことや、卒業に伴って活動から離脱してしまうことが、懸念すべき点として認識されていた。会話データ23からも判断するに、保護者は子どもへのスポーツ活動を長期的に行ってほしいという願いがあることが推察できる。さらに会話データ24のように、指導にあたるボランティアが一定であることで、より子どもとのいい関係性を築けることに言及している。これらのことから、長期的かつ一貫した指導が求められていると考えられる。

遠藤（2008）は、発達障害児の保護者が、子どもの余暇活動など、外部資源から支援を求める際、ボランティアの対応可能なニーズの制限を踏まえながらも、子どもに対する個別的な対応を強く望んでいたことを報告している。前述のスポーツ指導者に必要な資質についても、子ども個人への知識が豊富であることが挙げられたように、より、個に応じた適切な指導を求めることから、なるべくわが子にスポーツ指導をおこなうボランティアを一貫してほしいという思いに至るのではないだろうか。

これらは、大学生ボランティアならではの問題であるだろう。子どものことをよく理解した状態で指導してもらうためには、ある程度長期的な接触経験が必要になる。しかし、大学生は進学のために他県から来ている場合もあり、卒業後に当該地域で就職するとは決まっていない。むしろ、得られた回答からは、過去に卒業後に当該地域周辺で就職をした者がほとんどいなかったこと、もしくは、卒業後に近隣地域に就職をしたとしても、環境の変化や職場の協力、忙しさなどから大学生のころのようには参加できていないことが推測される。つまり、大学生ボランティアは、大学の卒業がそのままチームSからの卒業となってしまうという認識があった。信頼のおける指導者として活躍できるようになっても、いずれいなくなってしまい、また新たなボランティアに一から子どものことを理解してもらうということを、できるならば避けたいと考えているのではないだろうか。

一方で、大学生ボランティアは入れ替わりが激しいという点は、確かにマンパワーの減少という点からすればデメリットであるが、逆に、知的障害者にとって、仲間との別れや、新たな人との出会いを経験する機会と捉えることもできる。知的障害者がスポーツ活動を楽しむなかで、常に同じ顔ぶれではなく、様々な世代のボランティアとかかわることができれば、友人としてのかかわりはもちろん、時に親子のような、兄弟のようなかかわりをも可能とすることから、社会性を育むことにもつながるのではないだろうか。

≪会話データ20≫A
「いや、O君がそうしてずっとやってってければいんだけどもさ（笑）。やっぱし学生ったとこで、いずれはね（いなくなってしまう）。」

≪会話データ21≫B
「今はOさんとかMさんとかいてくれるんでー。いやでも卒業したらどうしましょう。大学に残ってくださいって言ってみたりして（笑）。」

≪会話データ22≫C
「２年……生くらいまではね、活発にこう参加できる。学生が３年４年になったらそうはいかない。ええ。でも、私達はそういうのを期待してるわけさ。」

≪会話データ23≫ C
「100%（の力）でなくてあと10%さ、なんかの時に残しといて、それでフルでやればさ。なんかあった時に10%頑張るった感じで、それよりかは長くやってもらいたい。」

≪会話データ24≫ A
「一定のボランティアさんつくと、そのボランティアさんがすごく気に入ればずっと、人について懐いてもいくし、活動にもすごくのめりこむって言うか⑥。」

5．指導技術のばらつき

また、大学生ボランティアに対する否定的な印象として、大学生ボランティア間にある、『力量の差』が確認された。三者ともインタビュー中、大学生ボランティアのなかでも挨拶や知的障害者との接し方、指導者としての姿勢などが大きく異なっていることを強調しており、特に良い指導者として個人名が挙げられる人物は共通していた。このことからは、ボランティアを呼称する際は、便宜的に「ボランティア」や「学生さん」としているが、評価については一括りではなくボランティアそれぞれに対して個別に行っていることがわかる。そして、その大学生ボランティア内の格差については、良く思っていないことがうかがえる。

保護者の評価軸としては、会話データ25，26などから判断するに、前述した指導者に求める資質について、しっかり満たしているかどうかが大きな判断材料となっている。会話データ27～29が顕著に示しているように、保護者は、ボランティアの参加の頻度や知的障害者に対する知識・接し方、指導者としての姿勢などについて、とてもよく観察し、「できる」指導者に対しては高い信頼をしていることがうかがえる。

しかし、ボランティアの知識量・指導技術・真剣さなどは、「大学生」に限ったことではなく、ボランティア活動という、有志で誰しもが参加できる活動においては、一般的に生じうる問題であるだろう。

≪会話データ25≫ A
「こういう子どもたちのことやっぱりわかってくれる人でないと、入ってきても大変かな～って。」

≪会話データ26≫ C
「やっぱりさ、Ｏさんは別格だけどさ、ＭくんいないとチームＳ成り立たない。うん。弱音吐かないでしょあの人。責任感も強いしね。大黒柱だからさ、大黒柱が崩れればウチ崩れてしまうんだ。」

≪会話データ27≫ A
「ちゃんと向き合って子どもたちとこう、接する……してないのかなっていうボランティアさんも何人かみられてたので。」

≪会話データ28≫ B
「でも、名前覚えてるのはやっぱり目立ってるお兄さんお姉さんのお名前ばっかりですよねー。」

≪会話データ29≫ C
「親御さん見てるからね。自分の子どもの、ほれ、親であればすべて知ってるわけだから、親でもあましてる（手にあまる）、それをコーチがどういうふうにしてるかわかってるからね。」

まとめ

今回の調査から、以下のことが示唆された。①スポーツ指導をおこなうボランティアに対しては、子どもについての知識、スポーツについての知識、またそれらを修めようとする指導者としての意識が求められると考えており、ボランティアの行動や姿勢から個別に評価をしていること、②ボランティアに対して、知的障害者と友人的な関係性が築きやすい点や、発想の豊かさなどから若年層全体に対するニーズがあること、③保護者は、子どもへの長期的な一貫した指導を求めており、大学生は卒業後に活動参加が難しくなることがデメリットとして捉えられていること、である。インタビュー結果のまとめはTable.2の通り。

大学生ボランティアに対する意識として得られた今回の回答は、概して「大学生」の特性というよりも、「若年層」全体に当てはまる部分も多い。ポジティブな側面として認識されていることからは、元気で思考に柔軟性があり、将来に期待ができる若年層のボランティアに対するニーズが確認できたと言えるだろう。チームＳの例では、活動で知り合った大学生ボランティアと知的障害者が、個人的に連絡先を交換し、プライベートでボウリングやカラオケに行くという例は多くあった。行動を共にする対象が家族や学校・施設関係者に限定されがちな知的障害者にとっては、ボランティア、特に年齢が近いボランティアとの接触があることは、交友関係を広げるという意味においても重要な意味を持つのではないだろうか。もちろん、プライベートでの行動については、監督責任や事故・怪我などの危険性も考えなければならないため、保護者も交え、事前に行動範囲や活動内容、本人同士の連絡方法などについて議論が必要となるだろう。

保護者は、大学生ボランティアに対しては、参加状況や知的障害者との接し方、指導の仕方などから、それぞれ個別に評価をしている。これは、大学生や社会人といった、日常生活における社会的地位からではなく、当該活動においてどのような活動実態があるかと

いう、実績においてのみ評価されているといってもよい。つまり、将来的な活動持続性という点においては、卒業に伴う転居が見込まれる大学生に対しては期待しにくいが、今現在、直接的な指導において「大学生」という社会的地位に対しては別段不都合は生じさせていないものと考える。指導者としての知識や経験、規範などが身についているかどうかが重要ということなので、年齢や社会的地位に関わらず、ボランティア本人の努力次第で十分に指導者としての役割を果たし、保護者からの信頼を得ることが可能であることを示している。事実、前述したように、大学生であっても保護者から絶大な信頼を受けているボランティアも数名確認されていた（会話データ21，26）。

大学生のボランティア活動への参加は、自己の学びや豊かな経験を得たいなど、利己的な動機が確認されることが報告されており（Winniford, et al, 1997．谷田，2001）、大学生のスポーツボランティアの実施率は低いものの、ボランティア活動に興味があるものは少なくない（内藤，2007）。知的障害者のスポーツ活動に大学生ボランティアを導入することができれば、指導者不足という問題を解消するのみならず、同世代との接触経験を生じさせ、また大学生本人にも有意義な経験をもたらすという、全ての関係者に大きなメリットをもたらす可能性が大いにある。

一方で、ボランティア本人の取り組み方で判断する、いわば実力主義である分、「ボランティアの皆さんには感謝している」としながらも、実際には大学生ボランティア内においてもその信頼に大きな差が生じている。今野（2007）は、障害者親の会の活動を継続していく中で、大学生へのボランティア要請が増えつづけており、一部の学生への過重負担という問題が生じていることを報告している。人と接する活動、しかもスポーツという怪我をする危険がある活動に参加する以上、誰であろうと社会的な責任は生じるのは当然である。しかし、あくまでも各自の自主性によって行われるボランティア活動として、保護者のニーズに対してどこまで応えていくのかという線引きについては熟慮される必要があるだろう。

本研究の課題としては、今回の調査では大学生ボランティアに対する保護者の意識に焦点を当てたため、ライフスタイルを異にするボランティアについての意識や、求められるボランティア同士の共同体制などについては言及できない点が挙げられる。知的障害者にスポーツ活動を提供することを、大学生ボランティアだけで実施するというのは、現実的ではないし、継続性・一貫性という点からしても、困難が生じると考えられる。今後は、大学や社会人ボランティアとの連携、期待される役割分担についても考察し、保護者や知的障害者本人が安心して参加できるスポーツ活動のあり方を探る必要があるだろう。

Table.2　主な質問項目と調査協力者の回答

	A	B	C
指導者に求める資質	・子どもの性格の把握 ・障害特性についての知識	・障害特性についての知識	・個性に応じた指導
		・スポーツ指導の造詣の深さ	・スポーツの専門的な知識
	・勉強してから参加する姿勢		・指導すべき点はしっかり指導 ・差別しない
大学生への意識	・年齢が近く友人的な存在である	・「お兄さん」「お姉さん」的存在	・子どもと年齢差がない
	・柔軟な発想力	・元気がある	・発想力がいい ・体力や行動力がある
		・子どもを見てくれるだけで満足	・大学生が知的障害者の理解をすることで社会全体の理解も改善
	・有能な大学生の卒業に伴う離脱	・有能な大学生の卒業に伴う離脱	・活動可能時期が限定される
	・指導技術の格差	・子どもも名前を覚えるのは頑張ってくれている人だけ	・一部の人が全体を支えている

参考文献

我妻則明、伊藤明彦（2002）知的障害児の肥満に関する研究の展望　特殊教育学研究　39（4）　65-72

遠藤愛（2008）　発達障害児の保護者がボランティアに向ける余暇支援ニーズの検討ー個別の活動報告による支援結果のフィードバックの効果ー　立教大学心理学研究　50　1-9

原美智子、江川久美子、中下富子、山西哲郎、下田真紀（2001）　知的障害児と肥満　発達障害研究　23（1）　3-12

Holroyd,J. McArthur,D.（1976）Mental Retardation and Stress on the Parents: A Contrast between Down's Syndrome and Childhood Autism. American Journal of Mental Deficiency, 80(4), 431-436

石黒久美子、中村攻、木下勇（1999）　知的障害者の余暇生活環境整備に関する基礎的研究ー知的障害者の余暇生活行動の実態把握とその規定要因の分析ー　千葉大学園芸学部学術報告　53　39-45

木谷秀勝（1997a）「スペシャルオリンピックス」の現状と今後の方向性に関する一考察ースペシャルオリンピックスの活動と“1997 World Winter Games”の報告を中心としてー　九州女子大学紀要　34（1）　9-14

木谷秀勝（1997b）学生ボランティアの特質と今後の課題　教育と医学　45（10）52-58

今野和夫（2007）　障害者親の会の研究ー「秋田すずめの会」の21年ー　秋田大学教育文化学部研究紀要　62　53-63

松尾哲矢（2004）　スポーツ・ボランティアとその専門性～【ボランティアー専門職】指導者システムの再構築～　体育の科学　52（4）　270-276

望月浩一郎（2007）　日本の障害者スポーツと法をめぐる現状と課題　身体教育医学研究　8（1）　1-11

文部省高等教育局（1999）　大学教育におけるボランティア活動の推進について　大学教育研究会監修　大学資料　143.144合併号　43-68

内藤正和（2007）　大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究　愛知学院大学心身科学部紀要　3　21-29

中山孝之（2000）　知的障害児の余暇と地域生活ー余暇の実態調査よりー　北海道教育大学情緒障害教 育研究紀要　19　239-246

於保真理（2004）　10代の知的障害児の余暇活動に関する研究ー172人の親からのアンケート調査を中心にー　湘北紀要　25　15-21

高畑庄蔵、武蔵博文（1997）　知的障害者の食生活、運動・スポーツ等の現状についての調査研究ー本人・保護者のニーズの分析による地域生活支援のあり方ー　発達障害研究　19（3）　235-244

妹尾香織（2003）　援助成果経験状況の予備的検討ー若者の援助成果経験の事例ー　関西大学大学院人間科学：社会学心理学研究　59　205-219

山田信子（1990）　精神遅滞者の余暇の実態とよりよいあり方について　情緒障害教育研究紀要　9　111-114

谷田勇人（2001）　福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析　社会福祉学　41（2）　83-93

渡邊浩美（2006）　障害者スポーツの社会的可能性　21世紀社会デザイン研究　5　135-144

Winniford,J.C. Carpenter,D.S. Grider,C.（1997）Motivations of College Student Volunteers: A Review. NASAPA Journal, 34（2）, 134-146

（2011．８．８受理）